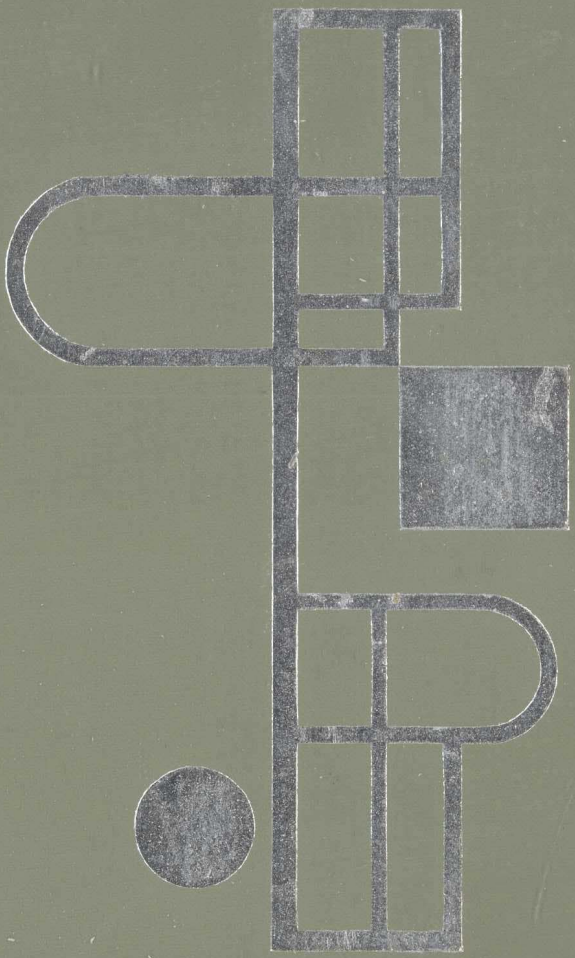
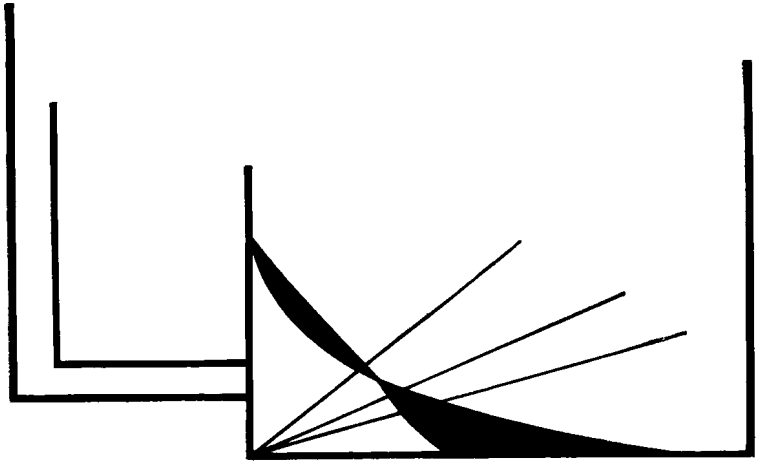


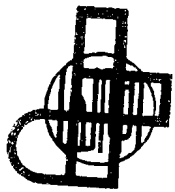
# 中山義秀集

新選 現代日本文學全集
6



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 6



中山義秀集

昭和三十五年六月十日 発行

著者 中山義秀

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行者 古田晁

東京都青梅市根ケ布三八五
印刷者 山田一雄

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行所 筑摩書房

〔電話〕東京 三元一局(291) 七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整版 株式會社 精興社
印刷 株式會社 精興社
製本 和田製本工業株式會社

中山義秀集　目次

テニヤンの末日……五
魔谷……二八
少年死刑囚……四〇
散りゆく花の末に……六五
古老譚……八四
闇に浮く睡蓮……八九
霧にゆらぐ藤浪……一〇八
寂光の人……一二七
高野詣……一五三
月魄……一六三
原田甲斐……一七六
寿永の春……一八六

春風秋雨……二八
天保の妖怪……二三四
相学奇談……二四五
平手造酒……二五六
根岸蒐角……二六九
北条早雲……二七九
松永弾正……三〇四
物ぐるい……三二九
戦国史記……三四六
中山義秀……河上徹太郎　四一〇
解説……河盛好蔵　四一五

装幀　恩地孝四郎
　　恩地邦郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 中山義秀集

# テニヤンの末日

## 一

敗戦後四度目の夏がめぐつてきた。サイパン、テニヤンの陥落から丁度五年目になる。浜野修介がテキサスの俘虜収容所から送還されて三年目だ。祖国へかえつてきて以来あわただしい月日をくりかえしてきたが、時はすぎるようにして過ぎてゆくものである。混乱や破壊も徐々とながら水が水平にきするようにいつかあるべき姿にたちかえり、人間の凄じい体験や恐しい記憶も同じようにして時日とともに遠ざかり薄れてゆく。

周廻十五哩ばかりにすぎぬ太平洋上の蕞爾たる一小島テニヤンには、陸海の軍隊と居留民をあわせて万余の人々がいた。終戦後無事日本へかえりえた者はその十が一にも足りまい。将校にいたつては五指を屈するほどの数があるかどうかも分らぬ。浜野大尉はその少数な将校中の一人だ。この事を考えるとつくづく、神の恩寵といつたものを感じないではいられない。ことに無二の僚友だつた岡崎大尉の死を思う時、その感情は一層痛切に身にこたえてくる。

浜野と岡崎とは高等学校以来の同級生だつた。二人がはじめて友となつたのは、一高山岳部員が北アルプスを踏破した時である。碧空とまばゆい雪渓を背景としてなりたつた二人の交遊にはそれだけなつかしく忘れがたいものがある。

二人は医学を専攻して大学を卒えた。岡崎は二年現役の軍医として海軍へ入り、浜野は大学の研究室にのこつた。しかし一年をすぎぬ間に、浜野もまた岡崎の後をおわなければならなくなつた。そして昭和十九年の二月下旬、ほぼ期を同じくして二人ともマリアナの航空隊基地、テニヤンに派遣されることになつたのは、偶然ではあつたが奇縁というほかはない。

岡崎は先に特設空母で、浜野は後から飛行機でテニヤンへ向け内地をたつた。浜野がテニヤンに着くとほとんど同時に空襲があつた。トラック島を急襲した戦爆聯合の敵機動部隊が、余勢をかつて北上しマリアナ基地をおそつてきたのである。

浜野は赴任早々爆弾や機銃の洗礼をうけたわけだが、テニヤンの守備隊にとつてもこれは初空襲だつた。テニヤンはそれまでラバウルその他の前線基地にたいする、中継所にすぎなかつたからである。浜野は飛行機からおろしたシュートケースを持つてにげる暇がなく、飛行場側の叢林の中に身をつつ伏せにして颶風の時のすぎるのを待つた。三千米の滑走路をもつた飛行場には数カ所大穴があき、浜野のシュートケースにも機銃弾の痕があつた。

飛行場の北、海岸にちかく航空隊や守備隊の兵舎があつた。木造の長方形の建物が、幾棟となく並んでいる。その西側に病舎があつた。床の高さ一米半ばかり、周囲は二米の廊下になつている。組立ベッドの数約百台、隔離病室の設もあつた。

浜野が病舎の軍医将校等に赴任の挨拶をしている間に、戦死者や負傷兵がぞくぞくと病舎へはこばれてきた。銃撃された守備兵や爆死した対空火器の兵隊達だつた。収容した負傷者の数は、百台のベッドにあまつた。初空襲に狼狽した指揮官のあやまつた処置から、適宜に避退することをしないでそれだけ損害を大きくした。

浜野はあてがわれた宿舎におちつく間もなく、負傷者の手当に奔走しなければならなかつた。しかしその忙しさが却つて彼を救つた。いやおうなく軍医という任務をはつきりと自覚させられ、空襲の恐怖や赴任早々の気まずさから免れることができたからである。

浜野と同じ頃につくはずの岡崎大尉は、なかなか島へやつて来なかつた。岡崎の乗つてきた特設航空母艦が、サイパン島のガラパンに入港中同じ空襲で爆撃された。岡崎はそれに積んであつた医療品の跡始末にとりかかつていた。

戦死者の処置や負傷兵の後送などが一段落つくと、浜野は同僚に案内され自動車で島を一巡した。島をめぐつて環状道路がつくられてあつた。テニヤンは珊瑚礁の隆起した小島で、台湾島をそのまま小さくしたような形をしていた。

島の内部は北から南へかけ細長く台地をなしていて、とくに中央のラソと南端のカロリナスとが高かつた。

東海岸はわずかの砂浜をのぞいたほかは、全部きりたつような断崖だつた。東からおしよせる太平洋の荒波が、そこでふせがれていた。中央台地と海岸の間は、榕樹や蛸の木、マングローヴその他の熱帯樹で蔽われた密林である。

南端にちかい西海岸に、ソンガルンの町があつた。人口二、三千の小さな町で、砂糖工場や小学校や病院があつた。住民は戦前から居留していた邦人のほかに、戦争中徴用されてきた朝鮮人や琉球人がいた。土人はこの島にはいなかつた。

ソンガルンの港は一条の出口をもつたリーフで囲まれ、それが天然の防波堤をなしていた。さらに対岸二キロを隔ててアギーガン島があり、絶好の港だつた。港内は桟橋が一つ突きだしていて、そこからポンポン蒸気がサイパンとの間を定期的に往復していた。

時には桃色のネッカチーフを肩のあたりに翻とひるがえしながら、白粉の濃く唇の赤い女達がこのポンポン蒸気に乗つてやつてくることもある。この町には戦争中十数軒の料亭がひらかれて、百数十名にのぼる娼婦達が営業していた。そして戦局が急迫しない前は、前線へ行く者や帰る者、守備隊の将兵等の歓楽境となつていた。

密林地帯と高地をのぞけば、全島いちめんの甘蔗畑といつてもよかつた。戦前三千人の居留民が、それによつて衣食していた。飛行場は甘蔗畑をつぶしてつくつた。土壌は火山灰のように軽くて、少し深く掘ると珊瑚礁のかたい岩盤に達した。それ故つくろうと思えば、甘蔗畑の何処にでも飛行場ができた。

かわりに水はえられなかつた。ソンガルンの東北、カロリナス高地の山麓にちかいマルポに唯一つの井戸があつた。これが島のオアシスで、周囲に木立が美しくしげり、住民の貴重な財産でもあつたし生命の泉でもあつた。日常の用水としてはコンクリートの石槽を各戸にそなえて、屋根におちるスコールの雨水を桶にうけて貯えていた。

浜野は一日また島の公園となつているラソ山に登つてみた。ラソ山は高さ三十米ほどの丘陵で島の中心よりやや東北に位置していた。頂に南洋杉に囲まれた小さな祠があつた。祠ののきにしめ縄がかざられ、ふとい鈴の紐がひとすじまつすぐに垂れさがつている。テニヤン神社とよばれている祠で、海上をわたつてくる風が周囲の南洋杉の細枝をそよがせ、鈴のふと紐をゆすつている。紐をふつて鈴をならしてみても、内地にいる時のような感情はわいてこない。

台上から四方を望むと、陽光をぎらぎらと反映している海ばかりである。北の方四キロほどの距離にサイパン島の山が見渡される。反対の南の方角には、ロタ島が煙波の間に糢糊として横たわつている。西南では眼下にアギーガン島の絶壁が白波を砕いている。東方は漫々とした大洋だ。島影一つ見えない。

浜野大尉は白色の軍服に同色の戦闘帽をかぶり、短剣を腰に吊つている。内地から来たばかりなので、まだそれほど日灼けしていない。海風がたえずまともに吹きつけてくるので暑いとも寒いとも感じないが、温度が高く湿気があるためおのずと汗ばんでくるような身内のだるさを覚える。

内地を出る時は厳寒の時であつたのに、なんという気候の相違であろう。あたりには茶碗ほどの大きさのある白い素馨の花や、仏桑華の真紅の花が咲きほこつている。トタン屋根の粗末な小屋が七、八戸かたまつている眼下の部落では、パパイヤの木蔭に牛がなないたり鶏がかけだしたりしている。耳がじいんとするような静けさだ。密林の青葉の色が眼にしみ、海のはての水平線上にはうす赤い水烟がぼうとたちこめているように見える。

故国の遠いことが思われるにつけても、浜野はしきりと岡崎の来るのが待たれてならなかつた。彼は新任者なので、基地隊の中で孤独だつた。海軍軍医将校としての訓練も生活も、まだよく身についていなかつた。いわば新学士に軍服をきせたにすぎないようなところがあつた。

軍人になりきれぬ浜野は、周囲と調和しなかつた。彼は軍人の鋳型にはまつた将校達を、内心懐疑と批判の眼で見まもつていた。彼の父は東京で知名な病院を経営していた。母は熱心な

カトリック信者だつた。浜野も弟妹等も母の感化で洗礼をうけた。教養ある善良な家庭に人となつたので、専門の軍人達のように大声で部下をどなりつけたり、理由もなくひつぱたいたり、酒に酔いどれて放歌高吟したりすることができなかつた。

浜野はそのような人々を、真に勇気あるものとは信じなかつた。なんとなく内部の不安を、そうして胡麻化しているように思われてならなかつた。内省の力をかく者に、本当の信念が生れるはずはないと考えている浜野は、別人種の中にただ一人あるような思いで、誰とのつきあいもなく黙つて自分の仕事をはたしていた。

三月の十日頃だつたであろうか。

「岡崎大尉がお着きになられました」

そういう部下の報らせがあつた。浜野は自室の寝台にねころがつて歌集など読んでいたが、急いで病舎の方へ出ていつてみた。岡崎は軍医長に報告をすませて帰つてくるところだつた。浜野が岡崎を見るのは、大学をでて約二年ぶりである。互の消息はわかつていたが、任地が違うので会うことはなかつた。

岡崎は二年前とほとんど変るところはなかつた。緑色折襟の軍装で、病舎の廊下をこちらへガニ股で歩いてくる。身体はほそいが怒り肩だ。ほそい眉、やさしい眼つき、笑をたたえた口許の下に咽喉仏がつきだして見える。

岡崎は右手をあげて「やア」と言つた。浜野は走りよつて彼の手を両手で握つた。

「待つてたよ、君。来てくれてよかつたな、ほんとうによかつたな」

浜野はなつかしさに、涙があふれ出そうな気がした。しかし涙が流れてなかつた。熱い処では思考と同様感情もふかくは動かない。

「ま、君の所へ行こう、外地勤務は君は初めてだな」

「君だつてそうじやないか」

「しかし、僕は君より軍隊生活は先輩だよ」

岡崎は浜野の現在の心細い心境を、見通しているような口吻だつた。たしかにそれに違いなかつた。浜野は岡崎にたいしていると限りない力強さをおぼえた。二人は浜野の部屋で岡崎がサイパンから持つてきた珈琲をいれて飲んだ。

「あの時の空襲にあつたかい」

「丁度、飛行機でついたばかしで面くらつたよ。最初のお迎えが空襲なんだからね」

「前線らしくていいじやないか。しかし戦況は我が方に不利だね」

「大いに不利だよ」

「此処が僕等の墳墓になるのかな」

「そんな事はあるまい。先ずラバウルをとつてパラオに上陸し、其処を基地にしてフィリッピンを突く戦略に出るだろうと、此処の人達は言つてるよ」

「それだと助かるが、空頼みかもしれんぞ」

岡崎は咽喉仏をならしてせきこむような笑いかたをした。

「誰もこんな所で死にたくはないからなア」

それは浜野も同感だつた。現地へくるまでは多少の意気込や好奇心がないではなかつたが、いきなり空襲に遭い死の恐怖におびやかされたりしてみるとかぎりない心細さにおそわれた。この島でいたずらに死を待つているような不安にたえられなかつた。死ぬならば内地に帰つて死にたい。両親家族のいる所で死にたい。そういう願望にせめたてられた。しかしこれは浜野や岡崎にかぎつたことではない。おそらく外地にある全部の人々の心であろう。浜野は外地へ出てきてみて人間の生命が生れた郷土と、どんなに深いつながりを持つているものであることかに初めて気がついた。

「ところでこの島の防備状態は、一体どんな風なのだい」

岡崎は浜野に質問した。

「一個大隊の陸軍守備兵のほかに海軍の警備隊がいる。後は航空隊だ。兵数は相当だが大砲は数門しかない。高射機関銃も口径が小さいから、うつても敵機は墜ちないよ」

「そうか、そんなものか」

岡崎は意外に防備の薄弱なのに驚いたらしかつた。

「僕もきてみてがつかりしたよ。しかし、此処はもともと前線と後方との中間基地にすぎなかつたのだからね。戦局の進展がはやすぎて、防備が間にあわなくなつてしまつたのだ」

「それにしても、それじや戦争はできないよ。目ぼしい空母はボカボカ沈められてしまうし、

飛行機の数は少いし、優秀な敵に制海権を握られて後方を遮断されてしまつたら、我々は一体どうなるのかね」

病院のまわりにはバナナの木がうえてあつた。芭蕉に似たその広葉の間から北方の青い海が見渡された。波のうねりもみえぬ静かな海面を眺めていると、戦争はどこにあるかと思われ岡崎等の不安も嘘のような感じがした。事実浜野は岡崎が身近にきてくれたことで、なかば戦争の不安を忘れたような落ついた気持になつた。

## 二

浜野と岡崎との楽しい交遊生活がはじまつた。前線の孤島に朋友をむかえた者でなければわからぬ嬉しさである。浜野はこのような幸福をあたえてくれた神に感謝した。彼はいま迄の孤独な感情から救われてひどく元気になつた。

浜野と岡崎とは毎日の勤務がすむと、二人の部屋のどちらかに寄りあつて、燈火管制の暗い電燈の下で香りの高い珈琲をのみながら、時にはオリオンの傾く夜明け近くまで語りあうことがあつた。

二人には共通の話題があり数々の思い出があつた。高等学校や大学時代のなつかしい回顧談から、現実の祖国の情勢や戦争にたいする批判、つづいて戦後における世界情勢の変化や人類の究極のありかた、そのような本質的な問題について議論や意見をたたかわした。二人は日本がはつきりと戦争に負けるとは感情の上からも信じたくはなかつたけれども、やがて遠くない将来に講和が成立すれば今迄の暗い現実の反動からしても飛躍的に世の中が明るくなるような気がしてならなかつた。人類は今度こそ戦争に懲りて、永久の平和を講ずるようになるであろう。そのためには漸次国際的な世界国家の成立を考え、その理想にむかつて進むようになるであろう、是非そうなくてはならぬ、そうなつてほしいというのが二人の一致した念願だつた。

彼等二人は青春の初めから、いきなり戦争の現実に頭を突きいれられて、彼等の知性は少からず戸まどいしていた。本来平和であるべき文化の流が、急に其処で堰きとめられた形だつた。科学を専攻する彼等は、合理的な考え方や処置に慣らされてきていた。その傾向は岡崎の方がカトリック信者の浜野よりも甚しかつた。

岡崎は軍隊生活の虚偽や救うことのできない形式性を、二年間経験してきていながらそれに同化することができなかつた。其処に充満している不合理や矛盾を、たえず批判の眼で見まもつていた。又粘土のように柔軟な感受性や思考力をそなえた青年等が、軍の学校や兵営で強制的に一つの鋳型にうちこまれ、なかば器物化された均一品として作りだされてくるのに懐疑と反感をいだいていた。その点は浜野も同様で、彼等は局外者のような気持で周囲の軍人達を眺めていた。

「浜野君、君はここの航空隊の倉富分隊長を知つているか」

ある時岡崎が不意にそう言つて、浜野にたずねたことがあつた。

「ああ、あの遮光眼鏡をかけて飛行場の組立椅子に、いつもじつと腰をおろしてる男だろう。知つてるよ」

「あの男は此処ではずいぶん穏しくなつているが、内地の航空隊にいた時は暴れん坊で有名だつたのだ。パイロットとしても相当の腕をもつている筈だ。ところが此処じゃ、『飛行機に乗らない分隊長』つてアダ名がついてるそうじゃないか。内地では想像できなかつたことだ。前線へ来ると暴れん坊もみんなあんな風に、慎重になつてしまうものかね。一つしかない生命だから、できるだけ大事にしておくつもりかな」

浜野は岡崎の皮肉に直接にこたえるかわりに、

「とにかく、みんな変るよ。あの大尉一人じゃないね。変らないのは僕等ばかりかも知れない。初めから臆病者として、半文官視されているだろうからな」

そう言つて浜野は微笑した。

「半文官視されても、前線へくると思考上の半身不随者になつてしまうよりましだよ。彼等は自分の座標内の世界に住んでいる間は驚くほど勇敢だが、一歩外へ出るとカラ意気地がなくなつてしまう。機械的な集団教育の弊だよ。一人で生命の不安と直面するのにたえられないのだ」

岡崎の論鋒はするどかつた。しかし同時にそれはまた、彼自身の内省の声だつたのかも知れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ない。現地のこの島では誰も彼もある漠とした不安に圧えられ、人知れず悩んでいた。眼に見えず耳にも聞えず誰から知らされたわけでもないが、じりじりと圧迫してくる敵の勢力を無言の間に感じないではいられなかつた。

優勢な敵機動部隊は各所に出没して太平洋上の各基地と内地間の連絡を遮断し、機会ある毎に我が方の空軍をたたいてまさに制海権を握ろうとしている。我が方は及ばずながらそうさせまいとして、各基地の空軍をもつて敵を攻撃してゆく、しかも劣勢な我が空軍は、そのつど敵の餌食となつた。

実際我が方の攻撃機の消耗は著しかつた。

テニヤンの基地からも十機二十機と飛びたつていつたが、帰還機はいつもその三分の一にすぎない。ほとんど全滅の憂き目をみることすらある。ことに先頭にたつ隊長機は、絶対にかえつてきたことがなかつた。指揮官機を墜しさえすれば後は支離滅裂になる我が方の弱点を、敵は経験によつて知つたのであろうか。一時に数機むらがり襲いかかつて隊長機を落してしまう。

基地には新任の隊長と二十歳前後の紅顔の少年航空兵等が、次々と補充されてきた。まさに絶えざる人の流といつてよかつた。しかし一海戦あるごとに、その数は急にごそりと減つて、たといどのように我が方の「人的資源」が豊富であろうと、こんな状態では行末どうなる事かと不安がらずにはいられない。

攻撃隊の出発に際して基地航空隊の司令が飛行場正面の指揮台にのぼり、決死の隊員等に訓辞と激励の挨拶を贈る。遮光眼鏡をかけた倉富分隊長がその下にたち、黙々として隊員等の姿を見つめている。遮光眼鏡をかけているので彼の眼色はわからない。司令の挨拶が終つて一斉に挙手の礼が行われる。分隊長も手をあげる。それから司令と共に、一機一機飛びたつてゆく攻撃機を最後まで見送つている。

司令は宿舎へ帰つてゆくが、分隊長はなお飛行場の天幕内にとどまつていることがある。燃えたつばかり灼熱した赤土の飛行場を前に、天幕内で唯一人褐色の遮光眼鏡を光らせながらじつと腰かけている分隊長の姿は、孤独そのものといつた感じがしないでもない。彼はまだ三十になつたかならないくらいの頬のまるい青年だつた。しかしその日灼けした黒い顔の表情は、なんと考え深く年ふけて見えることであろう。彼は孤独を好むもののように、殆んど人と口を利かなかつた。

一時間後二時間後三時間後、敵機の激撃を熾烈な砲火をからくもまぬかれた味方機が、蹌踉としたていで飛行場へかえつてくる。出迎えた司令の前にたつて戦果を報告する。分隊長が側でそれを記録する。それから宿舎へ帰つて未帰還機の搭乗員達の名を書きつける。一回の攻撃から決して帰つてきた例のない隊長の名をまつさきに記す。そしてその名の下に戦死確認の印を捺す。

分隊長自身もいつかはそのように、司令の手によつて戦死確認の印を捺されるであろう。命令があれば彼の好むと好まないとにかかわらず、彼は飛行機に乗らなければならない。そして部下の飛行機をひきいて死地に突入しなければならない。避けることも遁れることもできない必然の運命と死が、いつも彼の眼の前にぶらさがつている。攻撃隊をおくりだすごとにその事実を確認している。

「倉富分隊長は、近頃しきりと本を読んでいるようだよ。前には書籍など、手にとつてもみなかつたが」

岡崎は浜野へそういう報告をした。彼は攻撃隊附の軍医なので、隊内の動静にくわしかつた。

「生きてきた自分達の生活以外に、意義のあるもつと違つた生活もあるのだということが、やつと解つてきたらしいな」

「しかしそれは却つて彼を、一層不幸にするだけじやないかな。盲目者は盲目なりに自分の運命を信じていた方がいいと思うよ」

「けれど、一度懐疑に憑かれた以上は、それを解決するまで苦悩からはまぬかれないよ」

たしかに岡崎のいうとおりだつた。浜野は倉富が飛行場の天幕内に悄然といつてもいいような姿で一人じつと腰をおろしている姿を見かけるたびに、彼をあわれむよりも彼の苦悩に敬意を表さずにはいられないような気になつた。

岡崎の部屋に風間という戦闘機隊長が、新しく着任してきた。風間は海軍兵学校出身の航空中尉である。海兵出身の将校は、学徒あがりの

短期現役士官はもとよりのこと、海軍機関学校や下士官出身の将校にたいして鼻息があらい。それは海軍の嫡流だという自負があるからだろう。ことに航空将校となると、側へもよりつけないような張りきりかただつた。そして風間中尉はその代表的な型といつてよかつた。

彼は六尺ちかい長身で、まだ二十四、五歳にしかならないのに、頬から顎へかけていつぱいに黒髯をはやしていた。みずから鹿児島出身の薩摩隼人と称して、両肩を怒らせながら家内を濶歩していたが、根は快活で単純な性質だつた。島へきてからはさすがに内地にいた時のような傍若無人の振舞をしなくなつたが、それでも怒ると彼の部下は決して彼の側へよりつかなかつた。彼の両眼に焔がもえだしたと見ると、みないち早く何処かへ姿をくらましてしまう。彼の平手打をくうとどんな大男の兵隊でも横へすつ飛ぶ。拳固で打たれようものなら、思わずギャツという声を発せずにはいられない。死を目前に予期しているだけに、彼の憤怒には狂気めいた殺気がこもつていた。

風間は赴任以来、寸時も部屋の中にじつとしていたことがなかつた。いつも何処で何をしているのか、おそらく航空隊や警備隊の兵舎をめぐつて彼らしい気焔を吐いてるのだろうが、時時ぬうつと自室へ姿をあらわしてくることがある。そして岡崎や浜野が茶菓を喰べていたりすると、黙つてその一つをつまみ又何処へか出かけて行つてしまう。ソンガルンの町へ行つて泥酔して帰つてくることもある。彼のことだから十数軒ある料亭を片つぱしから飲みあらしてくるのであろうが、いかに酔つていても同居者の岡崎に迷惑をかけるようなことはしなかつた。

風間は多くの軍人と同じように本を読まなかつた。彼にとつて書籍は「読んでも解らん」ものだつた。もつとも明日の生命を知らぬ戦闘機乗であつてみれば、到底本など読んでいるような落ついた気持でいられなかつたに相違ない。しかし彼は知識の豊富な岡崎にたいしては一目おいていたらしい。彼のわからぬ事を岡崎に質問して明快な答がえられると、「はアそうですか、はアそうですか」と殊勝げにうなずいていた。

テニヤン島から三十浬ばかりの東方海上に、友軍機が不時着したという報告があつた。島から早速捜索の救助艇がだされた。風間中尉が指揮官としてそれへ乗りこみ、浜野大尉が同乗してゆくことになつた。その日は南洋にはめずらしく時化模様の天候だつた。海上にはチラチラと三角波がたつていた。

港外のリーフに沿うて舵を南へとり島の東部へ出てゆくまでの沿岸は、見あげるばかりの断崖絶壁をなしている。太平洋の波濤はうわべはさほどに見えなくてもうねりが大きい。百噸たらずの汽艇はともすればその力におされて断崖にうちつけられそうになる。その荒波を乗りきり乗りきりして、目標の場所に到達するまでにはなみなみならぬ苦心を要した。

しかしせつかく苦心して目的の場所へついてみても、不時着した味方機はすでに波間に呑まれてしまつたものか、浩蕩とした海上にはいたずらに波濤のうねりを見るばかりで、それらしい物の影もみえない。

風間は汽艇の尖端にたつて望遠鏡で海面をくまなく捜索しながら、艇のコースをさらに東へ或いは北へ南へと指図している。大洋を遠く離れて出れば出るほど波はいよいよ大きくなり、汽艇は上下左右に動揺してしばらくも静かな時がない。二時間三時間と漂流をつづけている間に、船になれぬ浜野をはじめとして水兵の中にも胸ぐるしさをおぼえる者が出てきた。木の葉のような小艇内で、たえず身をもみ腹部をゆすぶり続けられるのだから、長くたえられたものではない。

しかし風間中尉は、容易に帰ろうとは言いださなかつた。ようやくすすまぬ顔色を見せはじめた船員等を叱咤しながら、艇の針路をあちこちと変えて根気よく捜索をつづけている。僚機の上を思う真情はそれほど切ないものであろうか。それとも同じ運命におちた場合の自分の身の上を考えているのであろうか。いずれにしろ諦めることを知らぬ彼の真剣な努力には、浜野は身の不快も忘れて心をうたれずにはいられなかつた。

とうとう日が暮れて、視界がきかなくなつた。南洋の日暮れはおそいかわり、闇が急速におちてくる。その頃になつて空が霽れだしてきた。

ひくい彼方の空に南十字星がきらめいている。まわりの群星より一つとびはなれて大きく、うるんだようなみずみずしい光を放ちながら、右方に少し傾いた姿で遠ざかるともなく近づくともなく、帰航をいそぐ艇をじつと見おろしている。

サイパンとテニヤンを分つサイパン水道に近づいた頃、雲間をやぶつて十日ばかりの月がぽつかりと姿をあらわした。初め朱盆のように見えた月の面が白銀色に澄んできたかと思うと、蒼茫とした青白い光がみるみる四方の海面へひろがつてゆく。艇のまわりで魚が鱗をひらめかしながらしきりと跳ぶ。艇の行手に一艘の小船が一抹の黒影となつて漂うている。サイパンあたりから同じく不時着機をたずねにでた汽艇らしく、エンジンをとめてこちらの近づくのを待つている様子である。乗員の姿が互に識別できる距離までくると、艦にたつた士官らしい男が口を両手でかこいながら叫んだ。

「誰の艇かア」

風間が舳から叫んだ。

「風間中尉だア」

「おツ風間、貴様まだ生きていたのかア。己は篠原だア」

「なに、篠原ア」

風間は思わず舳先におどりあがつて、力いつぱい右の拳をふりまわした。

「きツ貴様も、よ、よく生きてたな」

「友部は死んだぞオ」

「神崎は」

「神崎も死んだ」

「林はどうした」

「林も戦死だア」

「田代、小河内、富永、斎藤、今泉、野方、広瀬等もさつさと死んでしまつた。今度は貴様の番だぞオ、篠原」

「馬鹿言え、安島、寺内、小沢、永井、清水なぞまだ生きとるわい」

「それツきりか」

「それに、貴様と己とだ」

「うん、貴様と己と七、八人足らずだな」

二艘の汽艇は北と南と相ならぶほどになつたが、波が高いので一定の距離以上には近づけない。

「篠原、貴様サイパンにいるのか」

「ちよつと来たが、すぐひきあげる。貴様はテニヤンか」

「己も最近、移つてきたばかりだ。今日は不時着機をさがしに出たがどうしても見つからん。おそらく鱶にでも喰われたんじやろ」

「飛行機乗はお互さまだ。じや風間、失敬」

篠原の汽艇はエンジンの音をたてだした。

「篠原、ちよつと待てイ」

風間は舳先から艦へ走つてきた。

「己の顔をよく見ておけ」

「貴様の髯面なぞ、見たくあるものか」

二人は月光に半面を照らされながら向いあつた。それからどちらが先にということもなく、さつと右手をあげて挙手の礼をかわした。双方とも何とも言わない。そのままの姿で右と左にひきわかれていつた。

その晩浜野が岡崎の部屋に行つていると、風間中尉がぶらりと這入つてきた。

「やア、今日は御苦労さん」

浜野がそう言つて挨拶すると、風間はにやりと笑つて二人の間に割込んできた。そして卓上の黒羊羹に手をのばしながら、

「わしもそろそろもう、年貢のおさめ時がきたようです」

その口調がいつになくしめやかだつたから、浜野は彼をなぐさめるつもりで、

「今日、思いがけなく同期生に会つたりして、心細くなつたのじやないですか」

「ははははは、そうかもしれない。しかし——」

風間はそこでぽつりと言葉をきつて羊羹をほおばりだした。その眼は秋の水のように澄んでいる。雲がその上に影を落すように、思いなしか悲哀の色が深くその中に漂うているように見られないでもない。部下を戦慄させる猛者とも思われぬ優しさだつた。

「のう岡崎大尉、わし等は祖国の犠牲者だ」

岡崎は彼の言葉に黙つてうなずいた。その後間もなく風間の部隊はピリリウ島へ移動した。ピリリウはパラオ群島中の一つで、テニヤンの南はるか後方にある。つまりそれだけ後にひいたわけだが、敵機は容赦なくそこへも襲いかか

つてきた。風間機はその邀撃にただ一機飛びたつていつたが、はやくも頭上に殺到してきた敵機の斉射をうけて、一発の銃弾をはなつ暇もなくあつという間に海中深く潜没してしまつた。

風間中尉は岡崎の部屋に柳行李を一個残していつた、行李は彼の名札をつけたなり棚の上に空しく放置されてあつた。浜野はそれを見るごとに、髯武者の悲しげな眼色を思いおこして、何ともいえぬ憂愁をかんじた。

## 三

前任部隊だつた第七五五空軍がガム島へ移つた後、第一航空艦隊麾下の諸部隊は、飛行場の整備に忙殺されていた。テニヤン飛行場にはこれ迄、飛行場の掩蓋壕もなかつた。

さらに島の中部と南部に第二第三の飛行場が、居留民を動員して新設されることになつた。

兵隊達は朝の三時から起されて、終日労役にしたがつた。一日の休暇もあたえられなかつたので、彼等は寸暇があると何処へでも寝ころがつて、睡眠をむさぼつた。赤道以北十五度緯内にある熱帯地の労役は、暑熱のため体力の消耗がはなはだしくて疲労しやすかつた。そのため早朝の涼しい時をえらんだわけだが、大部分の兵隊はこの労働におわれて飛行場以外のテニヤンを知らずに過した。

第一次の空襲以後、ときおり小規模な敵襲があつたが、地上砲火は沈黙し味方機も応戦にとびださなかつた。その間に敵の制海権は次第に後方にのびひろがり、内地附近にまでおよぶようになつた。輸送路は遮断されて内地からの補給がたえ、各基地はなかば孤島化してしまつた。出る船出る船が撃沈されてしまうので、島の居留民はもはや内地送還を希望しなくなつた。内地から来る輸送船も無事につくのは稀で、沈められた船の兵隊や乗組員が丸裸で上陸してくることが多かつた。

過労のためか作業部隊の兵隊達の間に、カタル性の黄疸病患者が続出するようになつた。発熱して頭痛をうつたえ食慾がなく吐き気をもよおし、疲労と倦怠感におそわれて黄疸が発生してくる。こういう症状に最初に着目したのは岡崎大尉だつた。彼は病気の前駆症状や進行の経過をリストに作つて、各患者毎に記入していつた。

戦況の悪化につれて何となく危機が予感され、部隊すべての者が一種の不安におそわれている時に、このような病気の蔓延は部隊の士気を沮喪させた。病気の原因や潜伏期について、軍医達の間に種々の説があつた。流行性のものであることでは一致していたが、或る者は中毒といい他の者は腸間炎症の波及説をとなえ、又は胆管栓塞説を主張した。潜伏期についても、一週間説があり十日説があり一カ月説があつた。

岡崎や浜野の病室には、一個の顕微鏡と少数の試薬しかなかつた。しかし二人は協力しながら可能な範囲で、最善の研究をすすめようとはりきつた。部隊にとつては不幸なことではあつても研究のデータがえられたことで、二人は久しぶりに医学の学徒らしい精神の躍動を感じた。二人は毎日担当患者を診察して、病状を記録し統計にとつた。そしてそれぞれ観察したり調査したところを、互に報告しあつて討論した。

患者の数は四月上旬から、幾何級数的に増えていつた。

集団生活や作業を行つている兵舎から患者が多く出て、輸送機隊や航空隊からは一人も出なかつた。四月下旬に頂上に達して、それから徐徐に減退しはじめたところからしても、伝染病の疾患にちがいなかつた。

患者は最初に三七、八度の熱をだして一両日で下熱し、四、五日すると黄疸があらわれてくる。岡崎大尉は患者の舌先の乳頭が赤く色づきふくれあがつてくるのを見ただけで、黄疸の発生を予言できるようになつたと言つた。又発病の初期に膝蓋腱反射の軽度の亢進があり、発熱状態の時には白血球の数が減少することからして、本病が中毒性の疾患であつて、最初の腐敗期からその増進期にいたるものだと判断した。

岡崎の診断がはたして正しかつたかどうかは別として、彼の研究の熱心さには驚くべきものがあつた。そのため寝食を廃するほどではなかつたにしても、彼の精力と情熱をささげてこの研究に熱中した。食事や雑談の間を惜んで、病室へかけつけて行つた。彼の眼も顔の表情も、これまでの彼とは別人のように光り輝いて見えた。真理にむかつて戦をいどんでいるという彼

の誇と喜とが、岡崎の生活をよみがえらせたのである。

ところが岡崎の研究にたいして、意外な横槍がはいつた。岡崎の軍医長である小関少佐が、そんな調査は必要ないと言つて岡崎の研究をとめた。直上官の命令には従わないわけにはゆかない。岡崎は意気込んでいた彼の研究を、途中で放棄しなければならなくなつた。これは燃えあがつていた彼の若々しい精神にとつて、大きな打撃となつた。

それにしても小関少佐は、どうして岡崎の研究をとめたりしなければならなかつたのであろう。軍隊内の伝染病の蔓延を阻止して病源をつきとめ、その治療法に手をつくすのは軍医の本分ではないのか。上長官としては部下の軍医を督励しても、相努めなければならない筈のものである。

岡崎と浜野とは憤懣にたえなかつた。しかし軍隊というところは、理窟や合理性の通らぬ世界である。理と非を弁別することさえ許されていない。小関軍医長は軍人の中でも一風変つていた。ことに前線の孤島へ派遣されてきてからは、彼の奇癖は一層はなはだしくなつた。

小関は小柄で痩せぎすな四十男だつた。頭を丸刈にして口髭をはやしていた。召集される前はどつかの地方で、町医でもしていたのであろう。もう数年間軍隊生活をおくつてきたらしく、その動作は緩慢で職務に何の熱意も感じないらしかつた。報告や用向で彼の前に行くと、キョトンとした眼付で相手の顔を見あげ、それから口の中で何やらぼそぼそ言つた。

小関は病室にいても、ほとんど患者を診察しなかつた。いそがしい場合はよぎなく自分の前に患者等を裸にしてたたせ、前と後と身体の工合をざつとみて舌を出させ、眼瞼をひつくりかえしたりして突きはなした。兵隊などは文字通り、人間とも何とも思つていないらしかつた。

彼は病室の正面にある軍医長の席に腰をおろして、暇さえあるとナイフで有機硝子（ガラス）の破片を削つていた。有機硝子は爆砕された飛行機のものを飛行場から拾つてきたのである。彼はそれを円く削つて、メダル様なものを作りあげた。形ができると今度は紙鑢（かんやすり）で、削り口を丹念にみがきあげる。一個を磨きあげるのに何日もかかつている。人が前にくるとメダルの粉をフツフツと吹きとばしながら、指でつまみあげて自慢たらしく見せびらかす。その仕事以外に彼は何もしなかつた。

小関軍医長は慰めのない孤島の生活に、退屈しきつていたのであろうか。それとも彼は軍隊から放たれていつ帰れるともわからぬ自分の境遇に絶望してやけになつていたのであろうか。熱帯と暑熱と変化のない気候とは、ともすると人間をかぎりない無気力と倦怠におとしこんでしまうことがある。若い岡崎や浜野にとつては、この誘惑はおそろしかつた。彼等は強いて仕事をみつけても、これ等と戦いたがつていた。環境の力にまけて自分達が、庸劣化してしまつたという意識にはたえられなかつた。

小関はそういう彼等の若々しさや思いあがりを、妬（ねた）み憎んだのであろうか。そして彼らしい復讐をこころみたのであろうか。もともと小関と岡崎は、性格があわなかつた。小関は知性や精神上の働きからいえば、すでにその活力を喪失した老耄者（ろうもうしゃ）にすぎなかつた。真理の探究心にもえ科学の合理性の信奉者である岡崎とあう筈がない。そのため岡崎は内地に勤務している時から、精神上の畸形者である軍医長に苦しめられてきた。活潑にのびようとする彼の生命力は、いつも小関のために窒息させられてしまう。

軍医長と衝突した日の夜、岡崎は浜野の部屋へたずねてきて、彼にかわり病気の研究調査を続けてくれるよう浜野に頼んだ。軍医長の性格については、二人の間で今さら何もいうことはなかつた。またそういう不合理の許されている、軍隊内部の生活についても同様だつた。

浜野は岡崎の申出を承諾した。そして蔭からの岡崎の援助を惜まないでくれと言つた。浜野は所属部隊がちがつていたから、小関軍医長の指図や干渉をうける筋合はなかつた。そして浜野の軍医長はまだ赴任していなかつた。浜野は一人で先発してきたわけである。浜野は見る眼もいたわしいばかりに銷沈している岡崎の手をとつて、静かにその甲をなでながら岡崎をなぐさめた。

四月の末ちかく病院船の氷川丸（ひかわまる）が、サイパン島のガラパンに入港した。浜野は医療の薬品を

うけとるためにガラパンに行つた。彼はそこで学友の荒木に会つた。荒木はハルマヘラ島へ赴任する途中だつた。岡崎をはじめ海軍に入つている同窓生の話がでた。幸いに戦死した者は、まだない様子だつた。荒木は内地から持つてきたポール・ヴレリイの原語の詩集を二つに割つて、その一つを記念にくれた。ハルマヘラも空襲をうけて危険地帯だつた。二人は互の無事を祈つて別れた。

浜野は南洋興発会社の経営している売店にはいつて珈琲を買つた。片隅の棚に埃をかぶつてレコードが少しばかり積まれてあつた。ベートーベンのヴァイオリン協奏曲とモツアルトのピアノ協奏曲とジュピタアの一部だつた。浜野はそれ等全部を買いとつて、テニヤンへの土産にした。放蕩を知らぬ浜野や岡崎にとつては、読書と珈琲と音楽は何よりの慰めだつた。浜野と岡崎とは学生時代、しばしば日比谷の演奏会へ出かけて行つた。岡崎はとくにドビッシイが好きだつたが、そのレコードはなかつた。

五月上旬に浜野の軍医長が部隊といつしよにサイパンに着いた。軍医長の乗つてきた輸送船はガラパン港の直前でアメリカの潜水艦に撃沈された。しかも真昼時の二時だつた。まことに傍若無人と言おうか何と云おうか、不敵きわまる敵の行動である。ガラパンの邦人等は眼前にその光景を見せられて、ただ茫然とするばかりだつた。

浜野の部隊が兵舎におちつくと同時に、今度は岡崎の所属部隊がピリリウ島へ移ることになつた。部隊の移動には、備品の荷造やその他の準備がいる。そしてその度毎に船の沈没とか爆撃などによつて、少なからぬ代価を払わされた。浜野は岡崎との別離を考えて心さびしかつた。基地の生活に馴れ所属部隊が到着したとはいえ、親友が側にいるといないとでは大きな差異がある。ことに前途はかりがたい今となつては、一層別れがつらかつた。

しかし幸いなことには、部隊の一部が派遣隊として島に残されるようになり、岡崎はその隊の軍医官としてテニヤンにとどまることになつた。一寸先のことはわからないにしても、これは浜野にとつてもまた岡崎にとつても大きな喜びだつた。岡崎は大嫌いな小関軍医長を離れて、生活することができるからである。小関少佐が飛行機でピリリウ島へさつた後、彼のいない病舎内は急に広々としたような感じがした。

## 二

二、三日たつて岡崎大尉が、急に病気になつた。部下の衛生下士官が走つてきてそれを浜野へ告げた。痙攣をおこしてひどく苦しんでいるから、すぐ来てくれという。夕食後のたそがれ時だつた。今まで元気だつた筈の岡崎がどうしたことであろうと急いで彼の病室へ行つてみると、岡崎は部下の衛生兵三、四人にとりまかれながら寝台の上に仰向けになつている。

頭を枕からはずし顎を上向け、脚を少し内側に彎曲させて両手を上に突張つている。手頸を衛生兵の一人がささえていたが、拇指をはなして四本の指をそれぞれ固くくつつけ手頸を折曲げていた。腹を波うたせ、せわしい息使いで、「ビタカンを打つてくれ、ビタカンを打つてくれ」と叫んでいる。

部下が注射器の用意をして、皮下へ注射しようとすると、

「静脈静脈」と呶鳴つた。

「落ついて、落ついて」

浜野は岡崎に言葉をかけながら、彼の脈をとつた。岡崎は浜野の姿をみると、いくぶん安心したらしく静かになつた。脈は少しはやかつたが不整ではない。聴診器を心臓にあててきくと、鼓動は確実で雑音はなかつた。顔面はやや硬ばつて見えたけれども、眼球にも異状がなかつた。熱も平熱である。

岡崎はハツハツと息をはずませながらひどく苦しげな様子だつたが格別さしせまつた容態ではなかつた。たんに上肢にきた硬直性の痙攣にすぎないように思われた。浜野が部下にかわつて静脈注射をすますと、発作は数分でおさまつた。今日はこれで三回目の発作だという。その程度がだんだん激しくなるので、部下が心配して浜野へしらせたわけだつた。

「一体、どうしたんだい」

浜野が岡崎にたずねると、岡崎は発作にぐつたり疲れた様子で、

「クラーレ中毒だと思うんだ。昨日、へんな果

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com